

# 前橋市立図書館コレクション展

2023 前期

**会期** 令和5年6月1日（木）～ 令和5年8月20日（日）

**会場** 図書館本館 2階展示室・1階中央図書室

前橋市立図書館

(群馬県前橋市大手町二丁目 12-9 / 027-224-4311)

## 第1章 地域の歴史

### 1. 酒井雅楽頭家関係資料

| 作品リスト No.1-3 |

「酒井家史料」は、前橋藩主であった酒井雅楽頭家の歴史とその藩政に関する基本史料で、明治32(1899)年、当時東京大学助教授の三上参次、東京大学の学生で後に教授となった辻善之助らを中心に編さんが開始され、大正2(1913)年に14年の歳月を要して完成しました。酒井家所蔵の膨大な古文書を厳密に調査し、その祖・広親から24代・忠邦までを年代順に記しています。編さんされた史料は129点にのぼり、昭和58(1983)年に前橋市指定重要文化財に登録されました。この資料は、本館2階の郷土資料室で写本が閲覧できます。

『前橋風土記』は、貞享元(1684)年、第5代藩主・酒井忠孝の時代に、家臣の古市剛が著した地誌です。前橋の自然・気候・文化・歴史などを記しており、当時の前橋の様子をうかがうことができます。展示の資料は、明治38(1905)年に荻野広吉という人物によって作成された写本になります。

『直泰夜話』は、酒井家の家臣・勅使河原三左衛門直泰が著したもので、初代・重忠から9代・忠恭に至るまで、酒井家が前橋藩主であった約150年間の治世について記述されています。制度・所領・治績・家臣の系譜や動静など、藩政万般にわたる事項を知ることができます。展示の資料は、天明6(1786)年、齋藤幸当による写本です。

### 2. 松平大和守家関係資料

| 作品リスト No.4-5 |

徳川氏の一門である松平家は全国各地にあります。前橋藩主となった松平家は徳川家康の第二子秀康(二代將軍秀忠の兄)の五男直基を祖とし、代々大和守を称する家系です。その藩政記録である『前橋藩松平大和守家記録』は、日々の政務、藩主や家臣の日常、城下の出来事などを藩の用番家老が交替で書き継いだもので、松平家が奥州白川に在城した元禄11(1698)年から前橋で明治維新を迎えた後の明治10(1877)年まで、実に180年の長きにわたる記録です。昭和3(1928)年、当時の松平伯爵家に秘蔵されていたものを前橋市立図書館に移して補修と保存処理が行われたのち、昭和34(1959)年に正式に前橋市へ譲渡されたことを受け、当館所蔵資料となりました。

内容は、御用日記・家中事寄・給帳・日帳などに渡り、そのうち前橋在城時代の記録が全40巻の『前橋藩松平家記録』として出版されています。江戸時代の前橋の実態を知ることのできる大変貴重な史料で、平成24(2012)年に群馬県指定重要文化財に登録されました。

「御築城御免状」は文久3(1863)年12月20日付で幕府より下付されたもので、本丸・二ノ丸・三ノ丸と外郭土居堀、車橋と東南の馬出の土居堀の普請施行についての言上書となっています。これにより、前橋城の再築が正式に許可されました。その後、慶応3(1867)年に城は竣工しますがまもなく大政奉還となり、明治4(1871)年、廃藩置県に伴って廃城となりました。

### 3. 明治初期の前橋の様子

| 作品リスト No.6-7 |

明治初期、前橋が「前橋町」であった頃の生活の一端を覗くことのできる資料を展示いたしました。

「前橋町興行東京相撲番付」は、明治 16(1883)年 3 月のもので、前橋町で東京相撲が興行された際に用いられたものと考えられます。明治初期、相撲は芝居の次に盛んな興行物であり、前橋でも東京相撲がしばしば開かれたといわれます。右端に記載された「武蔵野英之助」は、この頃に活躍していた力士です。

前橋出身の力士としては、江戸時代に天川町から出た佐渡ヶ嶽沢右衛門さわがえもんなどがおり、この人物は現在まで続く佐渡ヶ嶽部屋の祖といわれています。

「上州前橋繁昌店一覽鑑」は明治 18(1885)年時点での前橋の商店を、相撲番付風に一覽したものです。当時の前橋における有力人物の名前も数多く記載されており、たとえば、勸進元「下村善右衛門ぜんえもん」は初代市長・下村善太郎の長男で、県議員や衆議院議員を務めたほか、東京を拠点に様々な事業を経営し、勢多郡北橋村（現・渋川市）に佐久発電所を創設した人物です。東の方の大関「竹内勝蔵かつぞう」は、幕末から明治にかけて財をなした生糸商人で、県庁を高崎から前橋に移転する際、下村善太郎らとともに建築費用の支援を行った、いわゆる「前橋二十五人衆」のひとりです。善太郎と会社を共同経営していたといえます。西の方の大関「荒井友七ともしち」も「前橋二十五人衆」のひとりで、家業の金物商よりも社会活動に熱心な人物であったといわれます。

明治 22(1889)年 4 月、政府はそれまで踏襲されてきた江戸時代の行政区画を一新する「市制町村制」を施行。これにより、「東群馬郡前橋町」が誕生します。そして明治 25(1892)年、前橋町は「前橋市」となり、令和 4(2022)年で 130 周年を迎えることとなりました。

## 第2章 地域の人物

### 1. 台湾の医療・衛生の功労者 はとりじゅうろう 羽鳥重郎

| 作品リスト No.8-11 |

医学博士。明治4(1871)年、勢多郡石井村(現・前橋市富士見町)生まれ。雅号・眠鰐みんがく。石井小学校を卒業後、群馬県中学校(現・県立前橋高校)に入学。明治22(1889)年、医術開業試験に合格し、明治29(1896)年、東京帝国大学医科大学内科学選科(現・東京大学医学部)に入学しました。翌年には医科大学助手として、伝染病院である東京市立駒込病院に勤務、赤痢菌を発見して『東京医学会雑誌(明治31(1898)年1月号)』に発表しますが、『細菌学雑誌(明治30(1897)年12月)』に志賀潔の論文が掲載されたため、発見者第1号とはなりませんでした。

その後、船医として活動したのち、明治32(1899)年に台湾へ渡り、総督府の台北衛生試験室に勤務します。明治42(1909)年には防疫医官に任命され、マラリアの根絶に尽力しました。また、当時「木瓜熱」「鳳林熱」と呼ばれ恐れられていた熱帯病である「台湾恙虫病ツツガムシ」の病原体を発見、大正8(1919)年、イギリス・リバプール医学校誌に研究論文を発表します。大正13(1924)年には外務省の中南米視察団に参加し、野口英世と言葉を交わす機会を得ました。大正15(1926)年、功績が認められ、医学博士となります。

退官後、昭和6(1931)年には花蓮港で「羽鳥内科医院」を開業しました。しかし、8年後に医院は火事で全焼、廃院してしまいます。その後は戦後まで台湾に滞在、昭和21(1946)年に帰国しました。晩年は愛媛の長男のもとで暮らし、昭和32(1957)年、87歳で亡くなりました。帰国後執筆された自叙伝に『眠鰐回想録』があります。

その生涯を台湾の風土病撲滅に捧げた重郎の功績を称え、台湾の実業家・許文龍氏が胸像を制作、平成29(2017)年に前橋市へ寄贈され、富士見公民館の玄関横に設置されました。

当館所蔵の羽鳥重郎資料は、平成26(2014)～27(2015)年にご遺族より寄贈いただきました。

【許文龍】昭和3(1928)年、日本統治下の台湾に生まれる。一代で「奇美実業公司」を築いた実業家。親日家で、台湾の近代化に貢献した日本人の胸像を制作し、台湾のゆかりの地と日本の郷里に寄贈している。

### 2. 戦時下に文化財を保護した台南市長 はとりまたお 羽鳥又男

| 作品リスト No.12-16 |

台南市長。明治25(1892)年、勢多郡富士見村(現・前橋市富士見町)生まれ。石井尋常小学校卒業後、東京の学校に入学するが、病弱のため帰郷、石井小の教員となります。大正5(1916)年、親戚の羽鳥重郎を頼って台湾に渡りました。翌年、台北教会にて洗礼を受けクリスチャンとなり、以降晩年までYMCA(キリスト教青年会)活動を積極的に行っていきます。

大正6(1917)年の台湾総督府中央研究所職員からはじまり、大正11(1922)年総督府属官、昭和3(1928)年総督府官房秘書課を経て、昭和9(1934)年に総督府秘書官室理事官兼人事課理事官となり、その後10年間、人事主任

官として台湾全域の任免・異動・給与を取り扱います。又男の公正な采配は「羽鳥人事」と呼ばれ評価され、従来、人事主任官は総督の入れ代わりとともに交代していましたが、又男は南弘<sup>みなみひろし</sup>・中川健蔵<sup>けんぞう</sup>・小林躋造<sup>せいぞう</sup>・長谷川清<sup>きよし</sup>の4代の総督に仕えました。そして昭和17(1942)年、台南市長に抜擢されます。

市長としての又男の仕事は、台南市の衛生状況の改善からはじまり、老朽化した孔子廟や赤崁楼<sup>せつかんろう</sup>といった文化財の修築、開元寺の台湾最古の釣鐘の供出阻止などを実行。戦時下のためこれらの取り組みには反対意見もありましたが、又男は長谷川総督に働きかけ、台湾の古都である台南の文化を保護しました。

戦後、帰国すると国際基督教大学の創設に尽力。同校は昭和28(1953)年に開校し、又男は昭和47(1972)年まで関係事務にあたりました。昭和50(1975)年、83歳で亡くなります。

平成4(1992)年には台湾の新聞『中国時報』が生誕百年特集記事を組み、10年後の平成14(2002)年には許文龍氏が胸像を制作、赤崁楼に設置しました。また、日本へも寄贈され、平成19(2007)年、珊瑚寺(富士見町)で除幕式が執り行われました。

当館所蔵の羽鳥又男資料は、平成29(2017)年にご遺族より寄贈いただきました。

なお、重郎とは親戚関係にあり、又男が本家筋、重郎の分家は「前羽鳥」と称していました。

### 3. 朔太郎研究に貢献した図書館人 しぶやくにただ 渋谷国忠

| 作品リスト No.17-19 |

図書館人、詩人、萩原朔太郎研究家。明治39(1906)年、長野県上伊那郡伊那村(現・駒ヶ根市東伊那)生まれ。昭和3(1928)年、明治学院高等部(現・明治学院大学)を卒業後、横浜市立図書館に就職して図書館生活をスタートさせました。司書としての経験を積みながら自身の図書館論を業界雑誌に発表、論客として知られていきます。昭和18(1943)年、37歳で前橋市立図書館長として赴任。以降退職までの23年間館長を務め、図書館を「公営貸本屋」ではなく「成人教育の中心的機関」に位置づけるための事業を次々と考案・実行していきました。その間、市立図書館のみならず、群馬県全体の図書館の充実にも力を注ぎ、特に昭和28(1953)年の県立図書館設立に当たっては、中心となって各方面との交渉を重ねています。

さらに、前橋市立図書館長としての仕事を通じて萩原朔太郎に関心を抱くようになった渋谷は、図書館内外において積極的に朔太郎事業・研究に関わりを持つようになっていきます。「萩原朔太郎展」「朔太郎祭」「朔太郎忌」の開催、二度に渡る『萩原朔太郎書誌』の発行、「萩原朔太郎研究会」の発足などといった数々の仕事と同時に、地元の同人誌に多くの研究論文を発表しました。これらの業績は、朔太郎の存在を広く世間に押し上げることに繋がっています。

昭和44(1969)年10月13日に63歳で亡くなった後の昭和46(1971)年、遺稿論集である『萩原朔太郎論』が出版されました。

#### 4. 芳賀村の植物学者 つのだきんごろう 角田金五郎

| 作品リスト No.20-23 |

江戸末期から昭和前期の植物学者。勢多郡芳賀村（現・前橋市こぎかし小坂子町）生まれ。萩原ていすけ禎助から数学を、群馬師範学校の佐藤穂三郎から植物・動物・鉱物学を、中根鷺三郎からは物理学や化学を学びました。小坂子役場に勤め、働きながら小学校正教員免許状を取得、明治41(1908)年12月に退職するまで芳賀小学校に勤務しました。教師を務めるかたわら、独学で植物の研究に励み、ジャポニカツノダ・ナベワリインシスなど新種の発見や各国の学者と標本交換など、菌類・せんたひ蘚苔類・ちい地衣類に関する世界的な研究者として知られました。学界に貢献した功労により、昭和9(1934)年、県庁で昭和天皇に拝謁し赤城山産地衣類標本13帳を説明しました。昭和15(1940)年には有志の手によって、「学術功労之碑」が自宅研究室付近に建てられています。

当館が所蔵する資料は、昭和44(1969)年にご遺族より寄贈されたものです。

【蘚苔類】コケ植物のこと。 【地衣類】藻類と菌類の共生体。

#### 5. 書家 おかにわまさと 岡庭征人

| 作品リスト No.24-27 |

書家。号・どんせき呑石。昭和19(1944)年、吾妻郡中之条町生まれ。群馬県立前橋高校から東京教育大学芸術学群書専攻（現・筑波大学）に進み、書を学びます。卒業後は群馬に戻り、県内公立高校・群馬大学・創造学園大学等で書を指導、同時に書作家として制作活動を行いました。作品は、個展のほか、他ジャンルの作家との二人展などで発表。コラボした作家には、井田淳一（洋画家）、田村吉康（漫画家）、吉田章二（洋画家）、椛澤健治（陶芸家）、吉田光正（彫刻家）らがいます。

群馬県展書道の部審査員、現代臨書展審査員などを務める。呑石書法研究会を主宰し、会員とともに展示会を開催するなど、精力的に活動を行っていました。著書に「書写概論」、作品集に「書・岡庭征人」などがあります。

展示の資料は、令和4(2022)年度にご遺族より寄贈いただきました。

## 第3章 幕末明治の出版物

---

| 作品リスト No.28-30 |

前橋市立図書館では、幕末から明治・大正時代にかけて出版された和装本を数多く所蔵しています。普段は書庫に保存されているため、市民の皆様にご覧いただく機会が少ないそれらの中から、今回、数冊を展示いたしました。

当館所蔵の和装本には、中国や日本の古典、当時の小学校や中学校で使用されていた教科書などといったものから、料理本や囲碁・将棋の指南本まで、幅広いジャンルのものがあります。大正5(1916)年に開館した当館のコレクションは、上野教育会附属図書館(明治33年設立)の収蔵品の継承から始まっており、その資料収集の歴史の長さの一端をうかがうことができます。

### 1階中央図書室展示品

---

#### 1. ふくざわいちろう 福沢一郎 《ケンタウロス》

| 作品リスト No.31 |

洋画家。富岡町(現・富岡市)生まれ。東京帝国大学文学部に入学後、彫刻家朝倉文夫に入門。大正11(1922)年第4帝展彫刻部に入選し、彫刻家として活動を始めます。フランスへ渡った際にシャガールやルーベンスの画風に興味を持ち超現実主義風の作品を描くようになり、7年間でさまざまな画風を吸収したことがその後に描く絵画の基礎を築きました。また、フランス滞在中の昭和5(1930)年には独立美術協会の結成に参加し、退会するまでの間日本の美術界に大きな影響を与えました。日本帰国後、戦時中に共産主義者の嫌疑をかけられて半年ほど連行留置されますが、戦後にはモニュメンタルな人間群像を描き、それについて「戦後の混乱期が、最も精彩があったように思う。」と語っています。国内や海外を巡りさまざまな作品を発表し続け、美術文化協会への尽力や多摩美術大学の教授として活躍しました。神話や地獄、歴史をテーマに思想と主題を盛り込む絵画スタイルで多くの作品を生み出しています。

「ケンタウロス」は、図書館が自由な学びの場であることの象徴として、現在の本館開館当時の昭和49(1974)年から中央図書室1階と2階の吹き抜けに面した壁に常設展示されています。深い青空の色と黄緑の鮮やかな大地を背景に、ピンク色のケンタロスが大きく腕を広げ飛び跳ねるようなポーズをとっています。後ろでは牧師が踊り、底抜けに明るい世界を楽しみ、生命を謳歌しているようです。この作品は昭和46(1971)年に群馬銀行から前橋市へ寄贈されました。

## 2. かわすみみちのすけ川隅路之助《春野》

| 作品リスト No.32 |

洋画家。前橋市生まれ。旧制前橋商業学校（現・群馬県立前橋商業高校）を卒業後に上京し、富山房出版社に入社して本郷絵画研究所（美術家の養成機関）で絵画を学びます。裕伊之助や辻永に師事、デッサンや油絵の指導を受けながら数多くの公募展に出品しました。その間に反アカデミズムと在野展への志向が強くなり、春陽会展を目指すようになります。昭和 14(1939)年に富山房を退社後、終戦まで神田電機学校（現在の東京電機大学の前身）の教員を勤めました。第二次世界大戦中の強制疎開で東京から前橋へ戻ると、終戦後まもなく前橋の亀升屋洋品店で横堀角次郎・南城一夫・中村節也・清水刀根とともに洋画五人展を開催。昭和 26(1951)年には群馬県美術家連盟を結成し、連盟展を創立するなどして活躍しました。団体や展覧会の良い成長を願うなら、構成員が常に変わらない誠意と愛情を持たなければならないという考えのもと、連盟や連盟展に尽力しました。その後、16年間前橋市立工業短期大学（現・前橋工科大学）で学生に建築デッサンの指導を行い、その職を辞した後も公募展への出品や個展の開催など、精力的に活動を続けました。

## 3. もぎこういち茂木紘一《前橋駅前風景》

| 作品リスト No.33 |

画家。昭和 17(1942)年、前橋市生まれ。前橋市立図書館近くの長屋で育ち、群馬県立前橋高校を卒業後の昭和 45(1970)年に創元展で初めて入選すると翌年には船岡賞を受賞、昭和 55(1980)年まで出品を続けました。昭和 48(1973)年には日展で初入選を果たし、前橋市民展でも市制施行 80 周年記念賞を受賞しています。そのほかにも日仏現代美術展や昭和会展など、さまざまな公募展に精力的に出品し、多くの賞を受賞しました。

展示品の「前橋駅前風景」は、JR 前橋駅の旧駅舎がモチーフで、ケヤキ並木など当時の駅舎の様子と駅周辺の風景が描かれています。この作品は現在の図書館本館が開館した直後に画家本人から寄贈されました。令和 3(2021)年に市民活動により絵画の修復作業と額装が施され、新たな装いで図書館に展示されています。



#### 4. <sup>たかたひろあつ</sup>高田博厚《萩原朔太郎像》

| 作品リスト No.34 |

彫刻家、随筆家。明治 33(1900)年、石川県鹿島郡矢田郷村（現・七尾市岩屋町）生まれ。生まれて間もなく福井県福井市へ移り、福井県立福井中学校（現・福井県立藤島高校）へ進みます。小学生の頃から絵を多く描いていて、中学生の頃には同じ中学の生徒と卒業生数名で合同展覧会を開催します。この時、共に展覧会を開催したうちの一人、雨田光平の粘土細工で初めて彫刻に触れました。高田は自身について、学校の勉強はしなかったが英語が図抜けて得意で、中学生の頃にシェイクスピアを原文で読み、ゲーテやトルストイ、ドストエフスキーに夢中になっていたことを語っています。大正 7(1918)年に上京して高村光太郎と出会い、共に図画展へ出品します。2 人は生涯にわたって交友関係を保ちました。昭和 6(1931)年にはフランスへ渡り、作家のロマン・ロランや作家で詩人のマルセル・マルティネなど多くの文化人と交流をもち、日刊新聞「日仏通信」を発行、第二次世界大戦後には毎日新聞特派員も務めました。その後昭和 32(1957)年に帰国、東京や鎌倉にアトリエを建設して作品制作を行い、彫刻家だけでなく随筆家としても活躍しました。前橋市出身の詩人・高橋元吉との親交もあり、彼の追悼会も兼ねた昭和 40(1965)年の朔太郎忌では、「回想の詩人高橋元吉」という講演を行っています。

#### 5. 旧利根橋橋門装飾のレリーフ

| 作品リスト No.35 |

利根橋は明治 34(1901)年、近代的鉄橋として一新されました。そのとき双方の橋門に飾られたのが、群馬と前橋の旧名・厩橋の飛躍と発展を象徴したこの鉄造レリーフです。アメリカ・カーネギーカンパニー制作のこのレリーフは、菱形 4 面の形態で「馬の群れ」をあらわしています。昭和 38(1963)年の旧橋解体の際に前橋市が県より譲り受けて保存していましたが、前橋市の市制 80 周年記念事業として前橋市立図書館を新築する際に移管され、往時をしのぶ品としてその姿を現在に残しています。

#### 6. 萩原朔太郎の詩「竹」

| 作品リスト No.36 |

当館が開館する 30 年前の明治 19 (1886) 年、北曲輪町（現在の千代田町二丁目付近）に萩原朔太郎は生まれました。今回、中央図書室に掲出した「竹」の詩（一部抜粋）は、大正 4 (1915) 年 2 月に『詩歌 第 5 卷第 2 号』内で発表された作品です。発表時には「竹」という題がついた詩ですが、それに至るまでは「竹と新光」「光る青竹」「青竹と新光」「青竹と祈祷」など、様々な題が考えられていました。また、この詩について、朔太郎研究に尽力した渋谷国忠（第 2 章地域の人物で紹介）は、製作過程に北原白秋の影響がみられると論じています。

本館の中庭に生える竹は、現在の建物を設計した林昭男氏のアイデアによるものです。

## 参考文献

- 『勢多郡行幸記念誌』 石井睦雄 1935年
- 『躍進群馬県誌』 栗原新水 1940年
- 『眠鯨自叙回想録』 羽鳥重郎 1964年
- 『萩原朔太郎研究』 那珂太郎／編 1974年
- 『前橋市史 第三巻』 前橋市史編纂委員会／編 1975年
- 『前橋市史 第四巻』 前橋市史編纂委員会／編 1978年
- 『萩原朔太郎全集 第十五巻』 萩原朔太郎／著 1978年
- 『群馬県百科事典』 上毛新聞社 1979年
- 『自伝抄Ⅶ』 高田博厚／ほか著 1979年
- 『群馬県人名大事典』 上毛新聞社／編 1982年
- 『前橋市史 第五巻』 前橋市史編纂委員会／編 1984年
- 『前橋事典』 前橋事典編集委員会／編 1984年
- 『萩原朔太郎研究会会報 第1-38号』 萩原朔太郎研究会 1987年
- 『前橋の芸術文化のあゆみ』 前橋市の芸術文化のあゆみ編集委員会／編 1990年
- 『上州力士伝』 小西敬次郎 1993年
- 『前橋市立図書館80年の歩み』 前橋市立図書館／編 1997年
- 『川隅路之助生誕100年記念展画集』 川隅路之助生誕100年記念展実行委員会／編 2006年
- 『群馬新百科事典』 上毛新聞社 2008年
- 『美術家人名事典 建築彫刻篇』 日外アソシエーツ 2011年
- 『羽鳥重郎・羽鳥又男読本』 富士見商工会／編 2014年
- 『羽鳥重郎・羽鳥又男読本』 手島仁 2015年
- 『前橋風 創刊号』 特定非営利活動法人まやはし／編 2015年
- 『下村善太郎と當時の人々』 栗田秀一 2016年復刻発行
- 『製糸の都市前橋を築いた人々』 前橋商工会議所／編 2018年
- 『富士見ゆかりの偉人物語』 富士見商工会 2019年